

マトゥラーにおける仏像崇拝の展開（その1）

杉 本 卓 洲

A Study of the Buddhist Image-Worship at Mathurā

Takushū SUGIMOTO

1. はじめに
2. 王名および年号を伴うマトゥラー像
 - I. クシャトラパ時代（先クシャーナ時代）
 - II. クシャーナ時代
- 図版
3. ピターマハ像（以下次号）
4. アミターバ仏像
5. おわりに
- 略号表
- 引用文献

1. はじめに

マトゥラーは、周知のごとく、ガンダーラと並んで仏像の発祥の地として有名である。しかしながら、ガンダーラに比べると、いささか華々しさにおいて劣る面があるのを否定しえない。それはガンダーラの仏像の容姿が、人々を引き付ける魅力に富んでいるせいであろう。また、起源的に古くみられていることも作用しているかもしれない。しかし、マトゥラーの仏像には豊富な碑文が得られることによって、仏像に対する信仰のありかた、またその変遷について種々の興味ある問題を投げ掛けてくれる点において、ガンダーラの仏像に劣らずわれわれを引き付ける側面をもっている。たとえば、なぜか仏像が当初において「菩薩像」の名のもとに発祥したこと、しかもそれらが在家の信者たちよりは、説一切有部や大衆部などの部派に所属し、三蔵に精通する出家の比丘や比丘尼たちによって造立されていることなどがあげられる。また見逃してならないのは、アミターバ仏像の存在もさることながら、仏像が「神」(Deva)とか、ブラフマー（梵天）の別称である「ピターマハ」(Pitāmaha)とかの像と呼ばれている例が見られることである。このように、マトゥ

ラーの仏像にはインドにおける仏教徒の信仰の実態、民間やヒンドゥーの神々との関連等をはじめとして、なお未だ解明すべき数多くの問題が残されている。

マトゥラーの菩薩立像が、民間の崇拜対象であったヤクシャ像をモデルとして創られたことについては、かつて論じたことがあるので⁽¹⁾、ここでは残された問題のなかで、特にピターマハ像とアミターバ仏像に焦点をあてながら、マトゥラーにおける仏像崇拜の展開の一端について少しく検討を加えてみたい。

まず手続きとして、年号と像の名称の明確なものを主体にしながら、マトゥラーの仏像の展開の跡を辿ってみることにしよう。碑文や彫像は断片的なものが多く、問題となる点が少なくない。これまでに数多くの学者によってマトゥラー仏像の編年史的研究がなされてきているが⁽²⁾、それらはみなまちまちであって一致を見ないのが現状である。

カニシュカ王の即位年代が未定なものもあるが、カニシュカ王にも一世と二世、さらには三世もいたとか、さまざまに主張される。クシャーナ朝についても、カニシュカ王からヴァースデーヴァまでの治世を第2クシャーナ朝として、その前の第1と後の第3との3期に分けたり、カニシュカ王からヴァースデーヴァまでを第1王朝とし、その後にカニシュカ2世による第IIクシャーナ朝が存在したとしたりする。また、碑文の年号に関しても、判読し難いのに加えて、あるものには100年を加えて読むべきだとか主張される。また、碑文の書体がその年号と合わない例、碑文の年号が古くとも彫像が図像学的にどう見ても後世の作例としかいえないものが存在したりする。これらすべてにわたって考察することは、今はその余裕がないので、ここでは上の問題に触れるのは最小限にして、ただ碑文が記す年代順にマトゥラーの仏像を列挙してみて、凡その展開の跡をたどってみることにしよう。

2. 王名および年号を伴うマトゥラー像

ここではクシャトラパ時代、すなわち先クシャーナ時代、それにクシャーナ時代との二時代に限ってみていくことにする。

まずクシャトラパとは、紀元前100年以降後に西北および西インドに侵入してきた、シャカ族（サカ族、塞族）の王の称号であり、ペルシアのアカイメネース朝における地方総督（太守）の名称サットラップ（Satrap）をインド語へ転化させた言葉である。シャカ族は五つの支派に分かれ、インドとアフガニスタンの各地に割拠していた。そのなかの一つがマトゥラーに本拠を置き、約二世紀にわたって政権を維持した。またタキシラを首都として、パンジャーブを支配した政権も存在した。

マトゥラーにおけるクシャトラパの政権時代は、後一世紀に西北インドに新たに侵入してきたクシャーナ族の王朝をひらいたカニシュカによって、とって変わられることになる。カニシュカの王朝が何年に始まったかについては、諸説紛々としており、定説をみていないのが現状である⁽³⁾。紀元78年説、128（あるいは129）年説、144年説の三説が未だあい括

抗しており、研究者たちのあいだでばらばらに用いられている有様である。いずれもそれぞれに根拠を有し、にわかに決定しがたい。

碑文については、H. リューダースをはじめとして、多くの学者によって解説と研究が進められてきたが⁽⁴⁾、まだ未解説のものがあつたり、解釈に相違があつたりして種々問題が残されている。今は現段階の状況と範囲内で整理してみる外はなからう。

碑文のなかに明確に菩薩とか仏陀の名称が見える場合には、「」をつけて示し、不明な場合は単に座像とか立像とかで示すことにする。王名、年号、出土地、所蔵場所の順に記し、各項において諸学者の碑文および彫像の分類番号、主要な参考文献を提示する。なお、クシャトラパ時代（先クシャーナ時代）の作品では、王名および年号は明らかにされないが、碑文のプラクリット性が濃厚であることと彫像の様式の古さとによって、この時代に組み込まれる。

I. クシャトラパ時代（先クシャーナ時代）

A. 「菩薩」座像（足と台座のみ）。王名および年号欠，マトゥラー環状道路丘（ジャーマルプル西方）出土，ラクナウ博物館（B18）[図1]。

Lüders, § 72 <88> , Banerji, *EI*, X, p.109, No. 2, Plaeschke, No.67, 静谷615, 高田 A (挿図144, p. 348) , Van Lohuizen, *SP*, pp. 174-175, Fig. 34, Bajpayee, III, B, 3, Mitterwallner, pp. 74-79, Pls. 13-14, 定方 I , p. 83, III, 付図15, Sharma, *BAM*, p. 180, Fig. 86 ; *BAMS*, pp. 168-169. Fig. 75, 塚本63.

碑文には「雨季第2月、第6日に菩薩（像）（B [o] disaco）が…によって、両親とともに、造立された。」（1行）とあるのみ。台座の両端が欠けており、合掌する2人の人物像が浮き彫りされている。この2人はインドラとブラフマーを表わすとされるが、否定する学者もいる。

B. 座像（足と台座のみ）。王名および年号欠，バーラトプル・ゲート出土，マトゥラー博物館（1612）。

Lüders, § 86 <97d> , 静谷623, 高田 B (p. 348), Bajpayee, III, B, 1, 定方 II, p. 100, 塚本73.

碑文「アーラーナカ僧院に、大衆部（Mahasaghiya）の受納のために、一切諸仏の供養のために（sarvabudhap(u) [ja] (y)e)。」（1行）

C. 「菩薩」座像（完全態）。王名年号ともに欠，カトラー出土，マトゥラー博物館（A 1）[図2]。

Lüders, § 1 <125a> , Vogel, *ASI*, *AR*, 1909-10, p. 63, Pl. XXIIIa, Vogel, *Cat.* p. 47, Pl. VII ; *SM*, p. 106, Pl. XXVIa, Van Lohuizen, *SP*, pp. 172-174, Fig. 31, Czuma, p. 28, Fig. 4, 静谷565, 高田 C (図版63, pp. 328-331), 定方 I , p. 62, 付図1, Sharma,

BAM, p. 176, Fig. 79; *BAMS*, pp. 167; 199, Fig. 65, 山本§20-51 (本文238頁), 塚本 1.

碑文「アモーハアーシによって菩薩(像)(Bodhisaco)が造立された。自分の僧院に。一切衆生の利益安樂のために。」(3行)「カトラー菩薩像」としてよく知られる。マトゥラー菩薩座像の原型およびモデルをなすものである。菩提樹下に結跏趺座し、右手は施無畏印、左手は左腿に置く。大きな光背を有し、頭頂にはカパルダ型(巻貝型)の頭髮、偏袒右肩タイプの着衣法をとる。樹上には両側に飛天、菩薩の両脇にはインドラとブラフマー(?)が脇侍として仕える。台座には3頭のライオンが配されている。この菩薩像は、ラーマとラクシュマナを従えたヴィシュヴァーミトラ像として崇拜されていた、といわれる。

- D. 「菩薩」座像(左足と台座の左半分のみ)。王名および年号ともに欠、カトラー出土、マトゥラー博物館(A66) [図3]。

Lüders, § 2 <125c>, Vogel, *ASI*, *AR*, 1909-10, pp. 65-66, Fig. 2, Vogel, *Cat*, pp. 63-64, Sahni, *Cat*, pp. 33-35, Plaeschke, No. 36, 静谷566, 高田(挿図145, p. 349), 定方I, p. 62, 付図2, Rosenfield, *DAK*, No. 14, Sharma, *BAM*, p. 175, Fig. 78; *BAMS*, pp. 164-165, Fig. 60, 山本§20-63 (中央), 塚本2.

碑文「クシャトラパの... (優婆夷?) ナンダーによって菩薩(像)が...。一切衆生の利益安樂のために。説一切有部(?) (Sāvasthidiya) の(諸師の)受納のために。」(6行) 左足の脇には、脇侍の左足と衣服の裾が見える。台座には、合掌する女性と立ち上がる有翼のライオン、すなわちグリフィンが刻まれている。

II. クシャーナ時代

1. カニシュカ2年「菩薩」立像(首なし右腕欠)。コーサム(カウシャーンビー)出土、アラハバード博物館(AC2948:69) [図4]。

Goswami, *EI*, XXIV, pp. 210-212, Plaeschke, No.47, 静谷530, Rosenfield, *DAK*, No. 15; *MSS*, No. 8, Sircar, *SI*, No. 36A, 高田1(挿図120, pp. 323-324), 定方III, p. 78, 付図2, Sharma, *BAM*, pp. 183-184, Fig. 93, Czuma, No. 3, Shrava, No. 10, Härtel, No. 1, Fig. 3.

碑文には、カニシュカ第2年に、三蔵に精通する比丘尼ブッダミトラが、菩薩(像)を世尊・仏陀の経行処(*camkama*)に造立したことを記す(2行)。22年と読むべきだとの説もあるが、2年と採る学者が多い。サーカルは3年と読む。コーサム(カウシャーンビー)のゴーシタ寺院の遺跡より出土。巨大な像で、左手を腰にあて両足を少し開いて直立する。両足のあいだには蓮華の蕾が見える。左足の外側にも同様なものが認められる。

2. カニシュカ 3 年「菩薩」立像（右腕を欠くが、ほぼ完全態）。サルナート出土，サルナート博物館（A 3，B 1）[図 5]。

Lüders, 925-927, Sahni, *Cat*, p. 33, Vogel, *SM*, pp. 107-108, Pl. XXVIIIa, Plaeschke, No. 48-49, 静谷 1689-1691, Rosenfield, *DAK*, No. 16, p. 243, Fig. 53; *MSS*, No. 9, 高田 2 (図版 59, pp. 321-322), Mitterwallner, pp. 71-72, 定方 III, pp. 78-79, 付図 3, Czuma, p. 28, No. 4, Fig. 2, Sharma, *BAM*, pp. 184-185, Fig. 94; *BAMS*, pp. 172-173, Fig. 84, Shrava, Nos. 13-14, Verardi, *EW*, 35, pp. 67-101, Härtel, No. 2, Fig. 4, 山本 §20-42~44 (本文 pp. 237-238)。

碑文は傘蓋の竿、台座の前、像の後と、三カ所にある。三蔵に精通する比丘バラ (Bala) が、菩薩像と傘蓋および傘竿を、パーラーナシーの世尊の経行処に、両親、師友、三蔵に精通した女弟子ブッダミトラ、サンガの四衆などとともに造立したことを記す (10 行 + 3 行)。「サルナート菩薩像」とか「バラの菩薩像」とか呼ばれ、非常に有名で、マトゥラー菩薩像の代表的立像である。ヤクシャ像と酷似し、両者の関連は明白である。上のコーサム像よりも重厚で、力量感にあふれる像。頭頂は損傷している。顔は丸型、眼は丸く大きく見開き、唇は厚く、笑みをたたえているようであり、高さが凡そ 2.45 メートルの堂々とした偉丈夫の姿をしている。衣服を偏袒右肩型にまとい、両足を開いて直立する。両足のあいだにはライオンがうづくまり、左足の脇には樹葉の束のようなものが見える。左手は衣の裾をもって腰にあてている。右腕は欠損しているが、恐らくは施無畏印をとっていたと考えられる。像の背後には傘竿が立ち、頭上には直径 3 メートル余りの傘蓋が存在した。

3. カニシュカ 3 年 (?) 「菩薩」立像（首なし右腕欠）。シュラーヴァスティ（サヘート・マヘート）出土，カルカッタ・インド博物館（A2502）[図 6]。

Lüders, 918-919, Vogel, *ASI*, AR, 1904-05, Pl. XXVI d, Vogel, *EI*, VIII, pp. 173-179, Bloch, *EI*, VIII, pp. 178-181, *EI*, IX, pp. 290-291, Plaeschke, No. 52, 静谷 760-761, Rosenfield, *DAK*, No. 19, 高田 13 (挿図 119, pp. 322-323), Sircar, *SI*, Nos. 37-39; 44-45, Sharma, *BAM*, pp. 212-213, Fig. 130; *BAMS*, pp. 197-198, Fig. 120, Shrava, Nos. 5-6, Härtel, No. 3, 山本 §20-45 (本文 p. 238)。

カニシュカ 3 年 (?) にプシュヤヴッディ比丘の共住者で、三蔵に精通する比丘バラによって菩薩像と傘蓋および傘柱が、舎衛城の香殿 (Kosamba-kuṭiya) に、世尊の経行処に、説一切有部 (Sarvastivādin) の諸師の受納のために造立されたことを記す、長文の碑文あり (3 行 + 9 行)。高さが 2.48 メートルの巨像。上述の 2 「サルナート菩薩像」に似るが、重厚で力量感に富み、両足のあいだには髪束と蓮華の房の組合せがあり、後期の作品とみなされる。

4. カニシュカ 4 年座像（両足と台座のみ）。マトゥラー市出土，マトゥラー博物館（57.

4329)。

Sircar, *EI*, XXXIV, pp. 9-10, Plaeschke, No. 54, 静谷664, 高田 4 (p. 328), Bajpayee, IV, 3, 定方 II, p. 125, Rosenfield, *DAK*, No. 20; *MSS*, No. 11, Shrava, No. 17, 塚本 117。

「大王カニシュカの第 4 年、冬季第 1 月、第 1 日、この日に、説法師(dharmakathika) ダルマナンディ比丘と同じ僧院に共に住む者...が造立した。將軍(mahādaṇḍanāyaka) フンミヤカ(所造の) 壇(vedi) の上に。サッカ(シャクラあるいはシャーキヤ) の僧院に。この施物の喜捨により、両親・師...」(2 行)

5. カニシュカ 4 年「菩薩」座像(ほぼ完全態)。キンベル美術館(テキサス州, フォート・ワース) [図 7]。

Fussmann, *BEFEO*, LXXVII, 1988, p. 6, Pl. II.

碑文「大王カニシュカ第 4 年、雨季第 3 月、第 26 日に、比丘ボーディセーナの共住者である大徳(bhadatta) ダルマナンディンが菩薩(像)を造立した。自分の祠堂(cetiya-kuṭi)内に。両親と共に、(父方の伯母?)バドラーと共に、一切衆生と共に。」(3 行) 上述の「カトラー菩薩像」に類似するカパルディン型座像。光背の上半分を欠く。上方に飛天、両脇に払子を持つ脇侍がひかえる。台座の中央には法輪を横向きに戴く柱が立ち、両脇に華を捧げる人物、両端には翼をもつライオン(グリフィン)が刻まれている。[残念ながらフッスマンの図版は全体像を欠く]

6. [カニ] シュカ 4 年(?) (あるいは [フヴィ] シュカ 40 年?) 座像(首なし両腕欠)。出土地不明, カルカット・インド博物館 (N. S. 4143) [図 8]。

Lüders, § 172 <80b>, Sahni, *EI*, XIX, p. 66, No. III, Van Lohuizen, *SP*, pp. 198-202, Fig. 37, Mitterwallner, pp. 81-83, Pl. 22, 静谷 654 (663), 高田 21 (挿図 133, pp. 337-338), Sharma, *BAMS*, pp. 185-186, Bajpayee, IV, 1, 定方 II, pp. 117-118, Shrava, No. 18, 塚本 124。

碑文はリューダースによれば、次のように読まれるが、まったく確証はないとする。

「大王・天子 [カニ] シュカの第 4 年、冬季第 4 月、第 14 日、この日に、隊商主バヴァシュリーの...の妻ダーニヤバヴァーによって...」(2 行)。しかし、サフニは、最後に「ここにいかなる功德があろうとも、それは...でありますように」という、グプタ時代に見られる願文が載るとする。シュラヴァも、ダーニヤバヴァーによる寄進の菩薩像であるとし、同じように願文が載るとする。多くの学者はリューダースに従ってカニシュカ 4 年と読むが、ガンダーラからの影響とされる、いわゆる通肩型の座像であって、後述の 37 「アニョール菩薩像」と酷似し、フヴィシュカ 40 年と読む方が妥当であろう。しかし、チャンダが 30 年と読んだのに対して、ロハイゼンが 50 年と読むべきだと主張し、学者のあいだで一致をみない。

7. カニシュカ 5 年座像（台座の左部のみ）。ゴーヴィンド・チャヴァル出土，マトゥラー博物館（55.3533）[図 9]。

Plaeschke, No. 55, 静谷1722, 高田 5（挿図125, p. 328）, Rosenfield, *DAK*, No. 21 ; *MSS*, No. 12, 定方 III, pp. 79-80, 付図 4 , Mitterwallner, pp. 74-79, Pl. 15, Shrava, No. 23, Pl. XXV, Sharma, *BAM*, Fig. 89, p. 181 ; *BAMS*, Fig. 76, p. 170, 塚本118. 碑文には「...カニシュカ第 5 年、雨季第 2 月、...日に、...両親および一切衆生の供養のために」とあるのみ（2 行）。台座には法輪柱を崇拜する人、その前に華束を頭上に載せた侏儒（ヤクシャ）、後にはライオンの尾が見える。

8. カニシュカ 5（？）年「菩薩」立像（両足のみ）。コーサム（カウシャーンビー）出土，アラハバード大学古代インド文化史考古学科蔵 [図10]。

Shrava, No. 19. Pl. XXII.

「大王カニシュカ第 5（？）年に菩薩像が造立された。（三蔵に精通する）比丘尼ブッダミトラによって。仏・世尊の経行処に。」（2 行） 両足のあいだに、髪の毛の束のようなものが見える。

9. 「王名欠」6 年立像（両足と台座の上部のみ）。コーサム（カウシャーンビー）出土，アラハバード大学古代インド文化史考古学科蔵 [図11]。

Shrava No. 28. Pl. XXVII.

「大王の... 6 年、冬季第 3 年....三蔵に精通する比丘尼ブッダミトラによって、世尊・仏陀の経行処に菩薩（像）が造立された。」（3 行） 両足のあいだに蓮華の蕾がみえる。

10. カニシュカ 8 年「菩薩」座像（首なし左腕欠）。ルッセク・コレクション（Collection Russek），チューリヒ（Zurich）[図12]。

Fussman, *BEFEO*, LXXVII, 1988, pp. 6-7, Pls. III-V.

「大王カニシュカ第 8 年、この時に、比丘シンハカの弟子であるブッダラクシタが、世尊・シャーキヤムニの玉座（āsāna）に、菩薩（Bodhisāto）（像）を造立した。両親と共に、和尚（？）と共に、一切衆生と共に、梵行を同じくする人（sabrahmacarin）たちと共に。大衆部（Mahasa [ghika]）の諸師の受納のために。」（5 行） 右手は施無畏印を示す。右脇に頭部を欠く侍者が控える。台座には三頭のライオンが座る。

11. 「王名欠」8 年座像（両足と台座のみ）。出土地不明，マトゥラー博物館（33.2347）[図13]。

Lüders, § 154 <21a> , 静谷651, Mitterwallner, pp. 102-103, Pl. 37, Bajpayee, IV, 9, 定方 II, p. 115, Shrava, No. 32, 塚本115.

「第 8 年、雨季第 4 月、第23日に、比丘尼ブッダダーシーの[寄進]...ハキヤ（シャーキヤ？）僧院に、一切衆生の利益安楽のために。」（3 行） 台座の中央には法輪柱、

両脇に華綱をもつ供養者と合掌する供養者とを、それぞれ二名ずつ、両端に左右を見る獅子を配する。

12. [王名欠] 8年「菩薩」座像（臍から下、両足と台座のみ）。パーリーケラー出土，マトゥラー博物館（15.664）[図14]。

Lüders, § 128 <21c> , Plaeschke, No. 56, 静谷637, 高田 6, Bajpayee, IV, 10, Mitterwallner, pp. 104-109, Pl. 38, 定方 II, p. 111, Shrava, No. 31, 山本§20-63（左），塚本98。

「...第8年、雨季第2月、菩薩（像）（B [odhi]...）がシンハカの寄進として（造立された）。...（一切衆生の）安楽のために。」（2行） 下半身の前に見える衣は、後述の37「アニヨール菩薩像」の着衣法に類似しており、後期の作品であることを示す。台座の中央に法輪と三宝印（あるいはナンディパダ）を戴く柱、両側には華綱をもつ者がそれぞれ二人ずつ配され、両端には有翼のグリフィンが、左右向きに立ち上がった姿で示されている。

13. カニシュカ14年（あるいは54年、あるいは114年）「ピターマハ」立像（両足と台座上部のみ）。マトゥラー市出土，パトナー博物館 [図15]。

Lüders, § 81 <23b> , Sahni, *EI*, XIX, 1927-28, pp. 96-98, Mirashi, *EI*, XXVI, p. 293, Vogel, *SM*, p. 296, Van Lohuizen, *SP*, pp. 302-318, Fig. 67, Plaeschke, No. 202, 静谷622, 高田 7（pp. 310-312）, Rosenfield, *DAK*, No. 96; *MSS*, No. 85, Sircar, *SI*, II, No. 42A, Bajpayee, IV, 17, 定方 II, pp. 99-100, Shrava, No. 40, Pl. XXXIV, 塚本71。

「大王・天子・カニシュカ第14年、パウシャ月第10日、この日に、衣服製造業者ハースティの妻サンギラーが、世尊・ピターマハ（Pitāmaha）・正等覚者（Saṃmyasambuddha）・自己の教義を確立した方（Svāmata）・神（Deva）の供養のために、像を造立した。一切の苦を捨離せんがために。」（3行） 両足のあいだには蓮華の蕾、両端には脇侍か供養者の衣服の下の部分のみが見える。多くの学者が後期の作例とみなしている。

14. カニシュカ16年「菩薩」座像（両足と台座のみ）。マトゥラー市出土，マトゥラー博物館（2740）。

Lüders, § 157 <79b> , Plaeschke, No. 58, 静谷653, 高田 8, Rosenfield, *DAK*, No. 27; *MSS*, No. 17（10年とミスプリント）, Bajpayee, IV, 19, 定方 II, pp. 115-116, Shrava, No. 36, Härtel, No. 15, 塚本116。

「成就あれ！ 大王カニシュカ第16年、雨季第1月、第..日、この日に、僧院住者（viharin）である比丘ナーガダッタの寄進による菩薩（像）が、カシュティキーヤ（Ka-

ṣṭikīya 材木商人?) の僧院内の自分の祠堂 (cetiyaḥ) 内に....僧院住者たちと共に、一切諸仏の供養のために、一切衆生の利益安楽のために、大衆部 (Mahā-sāgghī) ya) の諸師の受納のために (造立された)。」(3行) 像容不詳。

15. [王名欠] 16年「ディティヤ・プルシャ (第二のプルシャ)」像 (台座のみ)。出土地不明, パトナー個人蔵。

高田28, Rosenfield, *DAK*, No. 98; *MSS*, No. 87, *Shrava*, No. 42.

「第16年、雨季第1月、第15日、この時に、ヴィーラセーナの息子、資産家、マント製造業者の...が、世尊・ディティヤ・プルシャ (Ditiya-puruṣa, 第2のプルシャ) の像を造立した。両親のために...ラージャセーナのために。一切衆生の利益安楽のために。...でありますように。」(3行) 像容不詳。仏陀を「第二のプルシャ」と呼んでいるのが注目される。

16. [王名欠] 17年「菩薩」座像 (両足と台座のみ)。出土地不明, マトゥラー博物館 (121) [図16].

Lüders, § 150 <24a>, Vogel, *ASI, AR*, 1909-10, p. 65, Pl. XXIVc, Plaeschke, No. 60, 静谷648, 高田29(挿図128, p. 328), Bajpayee, IV, 20, 定方 II, p. 115, *Shrava*, No. 44, Härtel, No. 4, Fig. 5, 塚本 110.

「第17年、雨季第4月、第...日、この日に、金細工師ダルマカの妻で、優婆夷のナーガピヤー (ナーガプリーヤ) が、菩薩 (像) を自らの祠堂 (cetiyaḥ) に造立した。法蔵部 (Dharmagutaka) の諸師の受納のために。」(3行) 台座には、華綱をもつ夫婦と子供の二組の供養者たち、両端には左右向きの獅子。

17. カニシュカ20年「菩薩」座像 (右足と左足裏、台座の左端のみ)。マトゥラー市出土, マトゥラー博物館 (18.1558) [図17].

Lüders, § 73 <29a>, Plaeschke, No. 61, 静谷616, Rosenfield, *DAK*, No. 29, Fig. 31; *MSS*, No. 19, Mitterwallner, pp. 74-79, Pl. 16, 高田 9 (p. 328), Bajpayee, IV, 26, 定方 II, p. 97, 付図 1, *Shrava*, No. 51, Pl. XLIII, Härtel, No. 7, Fig. 6, 塚本64. 「大王カーニクシャ (カニシュカ) 第20年、冬季第4月、...日に、神殿(?) (devalaya) に菩薩 (像) が造立された。両親と共に...」(3行) 台座には、中央の法輪柱の左側に華綱をもつ二人の供養者、端にはライオンが左向きに浮き彫りされている。

18. [王名欠] 22年 (あるいは122年) 「仏陀」座像 (首なし右腕欠)。マホーリー出土, マトゥラー博物館 (18.1557) [図18].

Lüders, § 74 <31a>, Van Lohuizen, *SP*, pp. 234-236, Fig. 54, Sahni, *EI*, XIX, p. 66, No. I, Rosenfield, *DAK*, No. 106; *MSS*, No. 95, Plaeschke, No. 221, Mitterwallner, pp. 151-154, Pls. 63-64, 静谷617, 高田30 (挿図135, pp. 312-313; 338), Bajpayee,

IV, 30, 定方 II, pp. 97-98, III, p. 83, 付図13, Czuma, No. 36, Sharma, *BAM*, pp. 207-210, Fig. 126; *BAMS*, pp. 193-195, Fig. 116, Shrava, No. 56, 塚本65.

「成就あれ！ 22年、夏季第2月、第30日、この日に、衣服製造業者の僧院に、仏陀の像が造立された。...の娘(?)によって...」(2行) ガンダーラからの影響とされる通肩型の着衣をなし、両手を左右平行にあげる姿勢をとる。足裏に三宝印(あるいはナンディパダ)と法輪を描く。台座は草で編まれた畳状をなす。台座の中央には結跏し施無畏印をなす座像、両脇に男女の大小二人ずつの供養者、両端に正面を向く獅子を配する。後述の37「アニヨール菩薩像」よりも後の作品。

19. ヴァースクシャーナ王22年(あるいは122年)「シャーキヤムニ」立像(両足と台座のみ)。サーンチー出土, サーンチー博物館(A83) [図19]。

Marshall & Foucher, I, p. 386, No. 829, III, Pl. 105c, Van Lohuizen, *SP*, pp. 312-314; *SAS*, 2, 1986, pp. 1-9, Fig. 5, 高田10 (挿図109, pp. 312; 325), Rosenfield, *DAK*, No. 107, pp. 238-239, Fig. 34; *MSS*, No. 96, Plaeschke, No. 218, Mitterwallner, pp. 147-151, Pl. 58, Czuma, No. 38, Shrava, No. 58.

「王ヴァースクシャーナ(Vāskuṣāṇa)第22年、雨季第2月、第10日に、世尊・シャーキヤムニの像が、ヴィドヤーマティによって造立された。両親・一切衆生の利益安楽...」(2行) 両足のあいだには髪の手束、左足の外側には脇侍の下半身が見える。台座の中央には、光背を有し、頭には宝冠を戴き胸には首飾りを着けて結跏する菩薩像、その右側には華綱をもったり合掌したりする供養者が五人、左側にはすべて華綱をもつ大人四人と子供二人、合計11人が配されている。左側の人物はみなシャカ族風の長いスカートを着けている。諸学者によって後期の作例とみなされている。

20. カニ [シュカ] 23年「菩薩」座像(首なし両腕欠)。ソーンク出土, マトゥラー博物館(20. 1602) [図20]。

Lüders, § 136 <31b>, Chhabra, *EI*, XXVIII, pp. 42-44, Sircar, *SI*, No. 45A, Rosenfield, *DAK*, No. 30; *MSS*, No. 20, Plaeschke, No. 63, Czuma, No. 8, Mitterwallner, pp. 74-79, Pls. 18-19, 静谷643, 高田11, Bajpayee, IV, 31, 定方 II, p. 113, III, pp. 80-81, 付図 8, Shrava, No. 57, Sharma, *BAM*, p. 182, Fig. 91; *BAMS*, p. 171, Fig. 80, Härtel, No. 8, Fig. 7, 塚本103.

「大王カニ [シュカ] 第23年、夏季第1月、この日に、僧院の主グンダ(?) (あるいは大王 [あるいは行政長官] マツヤグプタ) の娘プシュヤダッター(?) が菩薩(像)を造立した。自分の僧院に。一切衆生の利益...」(3行) 偏袒右肩型座像。台座には、法輪と三宝印(あるいはナンディパダ)が中央に刻まれ、その両側に華をもつ供養者を一人ずつ配する。両端に左右を向く獅子。

21. カニシュカ[年号欠]座像(首なし右腕欠)。ジャマールプル出土, ラクナウ博物館(B1)

[図21].

Lüders, § 26 <79>, Plaeschke, No. 64, 静谷574, 高田12 (図版64, pp. 327-328), Rosenfield, *DAK*, No. 24, *MSS*, No. 15, Bajpayee, IV, 51, 定方 I, p. 72, 付図18, Sharma, *BAMS*, p. 168, Fig. 72, Shrava, No. 9, 塚本15.

「ミトラシャルマン、ゴーシャカ、パローハシャーリカ、チッカカの父、母インドラダター (インドラダッター)...大王・王の王・カニシュカの...年に」(2行) 偏袒右肩タイプの座像。両脇に脇侍のいることがかすかに認められる。クシャトラパ時代の I-C「カトラー菩薩像」に近似。しかし、台座の中央には法輪柱が置かれ、左右に4人ずつ、花輪や華綱をもつ供養者が配されている。通例両端にいる獅子が見えない。

22. フヴィ (あるいはフヴェー) シュカ26年 (あるいは28年、あるいは25年)「アミターバ仏」立像 (両足と台座のみ)。ゴーヴィンドナガル出土, マトゥラー博物館 (77.30)

[図22].

Tewari, *EI*, XL, pp. 198-200, *IA*, *AR*, 1977-78, p. 97; 1979-80, p. 91, No. 46, 中村元『ブッダの世界』493-495頁, 図版7-16, 静谷1823 (p. 227), Mitterwallner, pp. 73-74, 定方 II, pp. 124-125, 付図18, Sharma, *SMAM*, pp. 142-143, Fig. 53; *BAM*, pp. 231-232, Fig. 151 (154とあるが誤り); *BAMS*, pp. 214-215, Fig. 146, Shopen, *JLAS*, 10-2, 1987, pp. 99-137, Shrava, No. 65, 塚本80.

「大王フヴィ (あるいはフヴェー) シュカの第26年 (あるいは28年、あるいは25年)、雨季第2月、第26日、この日に、隊商主サットヴァカの孫、資産家バラキールタ(?) (あるいはバラカッタ?あるいはバラキールティ?)の孫、ブッダバラ (あるいはブッダピラ) の息子である、ナーガラクシタによって、世尊・アミターバ (Amitābha) 仏の像が造立された。一切諸仏の供養のために。この善根によって、一切衆生に無上なる仏智 (buddha jñāna) の獲得 (あるいは聴聞) あらんことを。」(4行) 両足のあいだには髪束、右足の外側には脇侍か供養者の両足、左足の後には蓮華の円形文様の一部が見える。シャルマはグプタ時代の作例とみなしている。

23. ヴァーシ (あるいはヴァーサ) シュカ28年「世尊」座像 (首なし両腕欠)。サーンチー出土, サーンチー博物館 (A82) [図23].

Lüders, 161, Add. p. 175, Marshall & Foucher, I, pp. 385-386, No. 828; III, Pl. 124b, Lüders, *EI*, IX, pp. 244-245, Plaeschke, No. 227, 静谷1668, Sircar, *SI*, No. 48, Rosenfield, *DAK*, No. 109, pp. 239-240; *MSS*, No. 98, Mitterwallner, pp. 143-145, Pl. 60, 高田14 (挿図175, pp. 401-402), Czuma, No. 39, Shrava, No. 62.

「大王・諸王の王・天子・シャーヒー・ヴァーシシュカ (あるいはヴァーサシュカ) の第28年、冬季第1月、第5日、この日に、ヴィーラの娘マドゥリカーが、ダルマデーヴァ僧院内に、ジャンプ樹陰の岩上に座る「世尊」(の像)を造立した。この寄進によっ

て…」(3行) 結跏趺座をなし、胸には首飾りを着ける。腹のところが挟られている。後期クシャーナ時代の作例とみなされる。

24. ヴァーシ(あるいはフヴィ)シュカ28年座像(像容不詳)。ジャーマルプル出土、マトゥラー博物館 (A49)。

Lüders, § 28<33>, Growse, *IA*, VI, p. 217, No. 1, Lüders, *IA*, XXXIII, pp. 38-39, No. 8, Vogel, *Cat.* p. 60, Rosenfield, *DAK*, No. 33; *MSS*, No. 22, Plaeschke, No. 226, 静谷575, 高田15, Bajpayee, *IV*, 35, 定方 I, p. 73, Shrava, No. 63, 塚本16.

「ヴァーシ(あるいはフヴィ)シュカの統治の28年、冬季第3月、第…日に、…」(1行)。

25. フビシュカ29年(弥勒菩薩)座像(臍から下、両足と台座のみ)。ギリダルプル出土、マトゥラー博物館 (40.2879) [図24]。

Rosenfield, *DAK*, No. 35, Fig. 32, pp. 229-233; *MSS*, No. 24, 高田16 (挿図126, pp. 328; 334), Plaeschke, No. 80, 静谷665, 1724[付記], 定方 II, p. 125, 付図19, Shrava, No. 68.

「大王フヴィシュカの第29年、雨季第4月、第1(あるいは9)日、この日に、アーラキ[の住民]カラティタによって、…の僧院に、…法蔵部(Dharmaguptika)の受納のために、一切衆生の利益安楽あれかし。」(2行) 左足のところには水瓶が付せられている(これによって弥勒菩薩とされるが、銘記はない)。台座には、中央に法輪柱、左に華をもつ男女の供養者、右に男性と子供の供養者、両端には左右を向くライオンが配されている。供養者たちの服装はみなシャカ族風。

26. フビシュカ31年座像(両足と台座のみ)。ラール・バダール丘出土、マトゥラー博物館 (A71) [図25]。

Lüders, § 103<13a (1355)>, Vogel, *Cat.* p. 65, Plaeschke, No. 81, 静谷629, 高田17, Bajpayee, *IV*, 40, 定方 II, p. 105, Rosenfield, *DAK*, No. 38; *MSS*, No. 27, Shrava, No. 73, Pl. LIV, Härtel, No. 9, 塚本86.

「フヴィシュカの第31年、冬(?)季第4月、第20日に、クダー(あるいはクシェードラー)の寄進。…比丘尼ディンナーの女性の弟子…」(1行) すべて摩滅していて、台座上の彫刻の図柄も定かになし得ない。中央に柱のようなもの、その両側に供養者らしき人物が一人ずつ、両端には左右を向く獅子が配されている。

27. フヴィシュカ31年「菩薩(?)」座像(両足と台座のみ)。ヨーロッパ個人蔵 [図26]。Shrava, No. 71, Pl. LIII, Härtel, No. 10, Fig. 8.

シュラヴァによれば、次のように読まれる。「フヴィシュカの第31年、夏季第2月、第5日、この日に、10万金を有する敬服すべき人(lakṣa) ママの(建立した)サッジャ(サヒヤ)僧院の比丘ブッダサミー(ブッダスワーミー)の寄進。アラサトヤの息子

ミプタと共に、…両親・和尚・阿闍梨と共に。仏陀の勝利あらんことを (Budhaba [va] jaya bhavatu)。」(2行) しかし、ヘルテルは、「比丘ママー (?) の有知 (sajña) にして僧院の比丘である、ブリッダサーミの寄進として、菩薩 (像) が造立された。両親・和尚・阿闍梨と共に。一切諸仏の供養のためならんことを」と読む。台座には、中央に法輪を載せる柱、その両側に華綱を携えたシャカ族風のスカートをはいた男性三人ずつの供養者、両端には左右向きの、前足をあげ立ち上がる獅子が表わされている。なお、シュマ (Czuma, No. 9) によれば、ヨーロッパのドゥッセルドルフに、個人蔵として、31年銘のカパルディン・タイプで偏袒右肩の着衣をなす座像の完全な作例が存在するといわれる。脇侍は次の28のものに類似するという。[未発表]

28. [王名欠] 32年座像 (完全態)。アヒチャットラー出土、ニューデリー国立博物館 (L55. 25) [図27]。

Plaeschke, No. 82, 静谷1709, 高田31 (挿図131, pp. 332-333), Mitterwallner, pp. 79-81, Pls. 20-21, Rosenfield, *DAK*, No. 39; *MSS*, No. 28, Czuma, No. 10 (No. 15, pp. 70-71), Sharma, *SMAM*, p. 90, Fig. 27; *BAM*, pp. 188-189, Fig. 98; *BAMS*, pp. 176-177, Fig. 88, Shrava, No. 75, Härtel, No. 11, Fig. 9, 山本§20-54 (本文 p. 239)。

「第32年、冬季第4月、第8日、この日に、比丘ヴィーラナの寄進。両親および子孫とともに。一切の導師たちの利益安楽のために。年老いた (?) 沙門たちとともに。その弟子たちとともに。」(3行) 「カトラー菩薩像」(I-C) と酷似しているが、脇侍の持ち物が払子に代わって右の者は金剛杵、左の者は蓮華となり、金剛手 (執金剛神の先駆的存在) と蓮華手 (観音菩薩の先駆的存在) へと変容しているのが認められる。金剛手はパンツのみの裸形で、蓮華手は頭に立派な宝冠 (ただし化仏を欠く) を戴き、首飾りを着け、通肩型の着衣をなしている。金剛手も頭上に十字模様のついた平たい帽子を被ったり、スカーフ状のものを首に巻いたりして、ともにガンダーラからの影響が看取される。台座の中央には菩提樹が描かれ、左に花輪をもつ男性と女性、右に払子をもつ二人の女性があり、女性たちは長いスカートをはいている。両端に横向きの獅子を配する。

29. フヴェーシュカ33年「菩薩」座像 (両足と台座の上部のみ)。チャウバーラー出土、ラクナウ博物館 (B 2) [図28]。

Lüders, § 24<38>, Growse, *IA*, VI, p. 217, No. 2, Lüders, *IA*, XXXIII, pp. 39-40, No. 9, Bloch, *EI*, VIII, pp. 181-182, Sircar, *SI*, No. 50, Rosenfield, *DAK*, No. 40; *MSS*, No. 30, Plaeschke, No. 83, 静谷572, 高田18, Bajpayee, IV, 42, 定方 I, pp. 71-72, Shrava, No. 76, Pl. LVII, Härtel, No. 12, 山本§20-60 (上段中央), 塚本11。

「大王・天子フヴェーシュカの第33年、夏季第1月、第8日に、三蔵に精通する比丘バラの女弟子で、三蔵に精通する比丘尼ブッダミトラの姪である比丘尼ダナヴァ

ティーによって、菩薩（像）が造立された。マドゥラヴァナカ（Madhura-vanaka）に。両親と共に。」（2行）

30. フヴェーシュカ35年立像（首なし右腕欠）。ラーカヌー出土，マトゥラー博物館（A63）
[図29]。

Lüders, 151a(1420), Vogel, *Cat.* p. 62, Rosenfield, *DAK*, No. 41; *MSS*, No. 30, Plaeschke, No. 84, 静谷562, 高田19 (図版60, pp. 324-325; 381), Bajpayee, IV, 46, 定方II, pp. 125-126, 付図20, Czuma, No. 11, Shrava, No. 82, Härtel, No. 13, 山本 §20-50.

碑文には「成就あれ！ 大王・天子フヴェーシュカの第35年、冬…」とあるのみ（1行）。偏袒右肩型の着衣法であるが、上半身裸形で、腰下をドーティでまとっているように見える。左手は腰にあてる。高さ1.93メートルにおよぶ巨像。上述の2「サールナー ト菩薩像」に類似をみるが、両足の間には獅子に代わって髪束と蓮華の房の組合せを置き、新しさを示す。

31. ヤシャガ王36年（あるいは136年）座像（完全態）。シュラーヴァスティー出土，ニューデリー国立博物館（58.12）[図30]。

Narain, *JBRs*, XXXVI, pp. 51-56; XXXVII, pp. 230-232, Rosenfield, *DAK*, No. 114, *MSS*, No. 103, Mitterwallner, pp. 155-157, Pl. 66, Plaeschke, No. 233, 静谷 1721, 高田32, Sharma, *BAM*, pp. 213-214, Fig. 131; *BBGSM*, pp. 16-18, *BAMS*, pp. 198-199, Fig. 121, Czuma, No. 41, Van Lohuizen, *KRPI*, pp. 131-132, Pl. VI; *SAS*, 2, 1986, pp. 1-9, Fig. 3, Shrava, No. 83., Pl. LXI.

碑文は断片。「第36年、冬季第2月、第10日に、王ヤシャガ（Yaśaga）の…」（1行）通肩型の座像で禅定印をなす。頭髮は螺髪で、額には白毫相を着ける。蓮華文など種々の装飾をもつ大きな光背をいただく。台座はクシャ草で編んだ畳状のもの。台座の中央には法輪柱、両側に男女三人ずつの供養者、両端には正面を向く巨大な獅子を配する。諸学者は一致して後期の作例とみなす。グプタ時代の作品とみる人もいる。

32. フヴィシュカ39年「菩薩」座像（首なし）。パーリーケラー出土，カルカット・インド博物館（N.S. 4145; A. 25019）[図31]。

Lüders, § 126<41b>, Sahni, *EI*, XIX, p. 66, No. II, Vogel, *SM*, pp. 106-107, Pl. XXVIb, Rosenfield, *DAK*, No. 43; *MSS*, No. 32, Plaeschke, No. 86, 静谷636, 高田 20 (挿図124, pp. 327; 333), Bajpayee, IV, 48, 定方II, p. 111, 付図8, Czuma, No. 12, Sharma, *BAM*, p. 193, Fig. 101; *BAMS*, p. 180, Shrava, No. 85, Härtel, No. 14, Fig. 11, 山本 §20-55; §20-62, 塚本97.

「大王・天子フヴィシュカの第39年、雨季第3月、第5日、この日に、比丘尼ブシャハティニーの弟子である比丘尼ブグダデーヴィーによって、菩薩（像）が造立された。

両親と共に。一切衆生の利益安樂のために。」(3行) 偏袒右肩の着衣法。右手は施無畏印、左手は左足の腿の上に置く。両脇に脇侍が立っているのが認められる。台座には、中央に法輪と三宝印(あるいはナンディパダ)との組合わせ、その両脇に華をもつ二人ずつの供養者(比丘?)、両端にはそれぞれ横向きの獅子を配する。

33. フヴェーシュカ45年「シャーキヤムニ」立像(両足と台座の上部のみ)。出土地不明、ボンベイ(プリンス・オブ・ウェルズ)博物館(No. 2) [図32]。

Lüders, § 180<43>, Chandra, pp. 21-22, Pl. 61, Rosenfield, *DAK*, No. 48; *MSS*, No. 37, Plaeschke, No. 91, 静谷656, 高田22 (挿図121, pp. 324-325), Bajpayee, IV, 54, 定方II, p. 119, Shrava, No. 89, Härtel, No. 15, Fig. 12, 塚本129.

「大王・天子フヴェーシュカの第45年、雨季第3月、第15日、この日に、優婆夷クヴァシチャーによって、比類無き世尊・シャーキヤムニの像が造立された。アーリカーのローシカ僧院に、彼女自身の無病息災のために。両親・彼女の女主人(bhatarika)・シャマニカー・シャマニカーの母・ジューヴァカ・ジューヴァカの母および一切衆生の利益安樂のために。」(4行) 左足の外側には円形の蓮華文様、両足のあいだには供養者(?)の下半身が見える。

34. [王名欠] 46年「菩薩」立像(右足の指先と台座の一部のみ)。出土地不明、マトゥラー博物館(72.31) [図33]。

Iyer, *EL*, XL, Pt. 4, pp. 168-169, *IA*, *AR*, 1972-73, p. 72, No. 30, Pl. LB, 定方III, p. 81, Shrava, No. 91, Härtel, No. 16, Fig. 13, 塚本121.

「第46年、雨季第3月、第6日、(この日に)、… [サン] ガダーサの寄進である菩薩(像)が、マトゥラーの大將軍の僧院に(造立された)。一切衆生の利益安樂(のために) … [ピター] マハ(?)の像が大將軍の僧院に(造立された)。」(4行。上3行がブラーフミー文字で書かれているのに対して、[ピター] マハ(?)以下の第4行目はカローシュティー文字で書かれている。)

35. フヴィシュカ50年座像(両足と台座のみ)。出土地不明、マトゥラー博物館(B29)。

Lüders, 51, Growse, *IA*, VI, p. 219, No. 11, Vogel, *Cat.* p. 74, Rosenfield, *DAK*, No. 54; *MSS*, No. 43, Plaeschke, No. 97, Bajpayee, IV, 61, Shrava, No. 113, 塚本122.

「大王・天子フヴィシュカ王の第50年、冬季第3月、第2日に、…」(2行) ホーヘルによれば、台座には法輪を四人の供養者が華綱をもって供養する図がある、といわれる。

36. フヴェーシュカ51年「シャーキヤムニ」立像(両足と台座のみ)。ジャマールプル出土、ラクナウ博物館(B3) [図34]。

Lüders, § 29<52>, Banerji, *EL*, X, pp. 112-113, No. VI, Sircar, *SI*, No. 54, Rosenfield, *DAK*, No. 55; *MSS*, No. 44, Plaeschke, No. 99, 静谷576, 高田23 (p. 325), Sharma,

BAM, pp. 198-199, Fig. 110 ; *BAMS*, p. 185, Fig. 101, Bajpayee, IV, 63, 定方 I , pp. 73-74, III, 付図23, Shrava, No. 117, Härtel, No. 17, 塚本17.

「大王・天子フヴェーシュカの51年、冬季第1月、第…日、この日に、比丘ブツダヴァルマンによって、世尊・シャーキヤムニの像が造立された。一切諸仏の供養のために。この施物の喜捨によって、和尚サンガダーサに涅槃の獲得がありますように (nir-vānāvaptaye)。両親、…。ブツダヴァルマンに一切苦の止滅がありますように。一切衆生の利益安楽のために。大王・天子の僧院において。」(3行) 右足の外側に、膝まずいて合掌する人物が見える。

37. [王名欠]51年「菩薩？」座像(ほぼ完全態)。アニョール出土, マトゥラー博物館(A65) [図35]。

Lüders, § 134<12a(1354)>, Vogel, *Cat.* p. 63, Van Lohuizen, *SP*, pp. 188-194, Fig. 39, Rosenfield, *DAK*, No. 56 ; *MSS*, No. 45, Plaeschke, No. 100, 静谷641, Czuma, No. 16, p. 30, Fig. 7, Mitterwallner, pp. 83-86, Pl. 23, 高田33 (図版68, pp. 336-337), Bajpayee, IV, 62, 定方 II, pp. 112-113, 付図 10, Sharma, *BAM*, pp. 197-198, *SMAM*, p. 90, Fig. 27, *BAMS*, pp. 181-185, Fig. 100, Shrava, No. 116, 塚本101.

碑文は断片的で、判読し難い。「51年、夏季第3月、第4(?)日、この日に、…菩薩(?) (Bo.. [t] ..a) …大衆部 (Ma.. [ṅghika]) の諸師(?) の受納のために。」(2行) 「アニョールの菩薩像」として知られる。大分摩滅しているが、光背の上部を欠くのみで、ほぼ完全な像容を示す。いわゆる「通肩座像タイプ」で、ガンダーラからの影響をみる。しかし、両手を平行にあげ、右手は施無畏印、左手は衣の端を握るのはマトゥラー独自の作法である。結跏する両足を衣で完全に覆う。頭髮はいわゆる螺髪型をなす。台座には、中央に通肩の禅定仏、両脇に供養者、両端に正面を向く獅子を配する。一時、女神ドゥルガーとして村人たちによって崇拝されていた、という。

38. フヴィシュカ53年(台座のみ。座像か立像か不明)。ナローリー出土, マトゥラー博物館 (3622)。

Plaeschke, No. 102, 静谷1723, 高田24, Rosenfield, *DAK*, No. 59 ; *MSS*, No. 48, Shrava, No. 120.

「大王・天子フヴィシュカ第53年、雨季第4月、第10日、この日に、サンガセーナ(あるいはシンガセーナ)の寄進。」(1行)

39. ヴァースデーヴァ64年(あるいは67年)「シャーキヤムニ？」座像(左膝と台座の右端のみ)。パーリーケラー出土, マトゥラー博物館 (40.2907) [図36]。

Sircar, *EI*, XXX, pp. 181-184 ; Sircar, *SI*, No. 56A, Rosenfield, *DAK*, No. 65 ; *MSS*, No. 54, Mitterwallner, pp. 86-87, Pl. 24, Plaeschke, No. 118, 静谷639, 高田25, Bajpayee, IV, 71, 定方 II, p. 112, Shrava, No. 127, 塚本104.

「(天子) ヴァースデーヴァの64 (あるいは67) 年、雨季第2月、第…日、… [その功德が一切衆生のためならんことを願って、一切の引導師 (opana) たちの?] 供養のために、大衆部の諸師の受納のために、シャーキヤムニ (?) の像が、その屋舎とともに (sagiha) [造立された]。両親 [とともに] …資産家 [グハ] セーナによって。…」
(5行) 台座のなかには何も表わされず、ただ碑文が記されるのみ。右端に横向きの獅子。

40. 大王トリカマタ (?) 64年 (あるいは164年) 「菩薩」座像 (両腕を欠く)。ボードゥッガー出土、カルカット・インド博物館 (BG1) [図37]。

Lüders, 949, Cunningham, *Mahābodhi*, p. 53, Pl. XXV, Barua, p. 70, No. X, Fig. 33(a), Plaeschke, No. 249, 静谷 G45, 高田34 (挿図108, pp. 311; 333-334), Sharma, *BBGSM*, p. 18, Fig. 4, *BAMS*, pp. 201-203, Fig. 124, Williams, p. 33, Pl. 25., 山本 §25-1 (本文 pp. 305-306)。

「大王トリカマタ (?) の (治世) 64年、夏季第3月、第5日に、持律比丘…の共住者が、アマーティヤドゥラ僧院に、菩薩像を造立した。優婆夷…説法師 (dharmakathika) …とともに。この善根は両親・和尚の供養のためならんことを。…一切衆生の供養のためならんことを。」(4行) 118×94×32cm の巨像。偏袒右肩型。頭髮は螺髪、姿勢は極めて整然としており、偉容を誇る。クシャーナ時代に属すると見る学者、クシャーナ時代よりグプタ時代への移行期の作と見る学者と、見解が分かれる。しかし、グプタ時代のものとみる人も少なくない。

41. [王名欠] 74年「シャーキヤムニ」座像 (像容不詳)。カーマンあるいはカダンバヴァナ出土、所蔵地不明。

Lüders, 12, Bühler, *EI*, II, p. 212, No. 42, Plaeschke, No. 124, 静谷460, 高田35, Shrava, No. 131.

「成就あれ! 74年、夏季第1月、第15日、このときに、比丘ナンディカの寄進として、世尊・シャーキヤムニの像が、ミヒラ僧院に [造立された]。説一切有部の諸師の受納のために。両親および一切衆生の利益安楽のために。」(2行)。

42. [王名欠] 75年「シャーキヤムニ」座像 (右膝半分と台座上部左端のみ)。チャウバーラー出土、マトゥラー博物館 (84.45) [図38]。

Shrava, No. 133, Pl. XC.

「75年、冬季第1年、第17日、このときに、…僧院の主であるヒターカの娘、バラールの寄進として、世尊・シャーキヤムニの像が造立された。」(2行)

43. [王名欠] 79年「菩薩」像 (台座のみ。座像か立像か不明)。チャウバーラー出土、マトゥラー博物館 (89.2) [図39]。

Shrava, No. 134, Pl. XC.

「79年、比丘ヴィナヤダラの寄進。マッドゥヤ僧院に菩薩像の造立。」(3行)

台座の中央には法輪柱、その両脇に華綱をもつ供養者、両端に左右方向を見る獅子が配されている。

44. バドラマガ(王) 83年座像(右膝と台座の一部のみ)。コーサム(カウシャーンビー)出土, アラハバード博物館(89) [図40]。

Sharma, *BAM*, p. 210, Fig. 127; *BAMS*, pp. 195-196, Fig. 117, 定方III, p. 81, 付図9.

「シュリー・バドラマガ(Śrī Bhādrāmaga)の83年。」(1行) 右膝は厚い衣に被われており、後期の作品であることを示す。

45. バドラマガ(王) 83年座像(顔と右手が摩滅しているが、ほぼ完全態)。コーサム(カウシャーンビー)出土, アラハバード大学博物館 [図41]。

Van Lohuizen, *KRPI*, pp. 126-128, Pl. I, Czuma, No. 22, Sharma, *BAM*, p. 211, Fig. 128; *BAMS*, p. 196, Fig. 118.

碑文は判読し難い。「大王シュリー・バドラマガの83年、雨季第1半月(?)、第1日、この日に(?)、…」(2行) 上述の37「アニョール菩薩像」に類似するが、衣の襞が細くなっている。台座の中央には法輪と三宝印(あるいはナンディパダ)、両端には横向きの獅子。

46. バドラマガ(王) 83年座像(首なし右腕欠)。コーサム(カウシャーンビー)出土, アラハバード大学博物館 [図42]。

Rhie, *EW*, 26, 1976, Fig. 15, Czuma, No. 23, Sharma, *BAM*, p. 211, Fig. 129; *BAMS*, p. 196, Fig. 119.

碑文は未解読であるが(3行?)、上の45に類似。寄進者の名、願文が続くようであるが不詳。[45と46の碑文について定方晟教授のご教示を得た。深謝したい。] 像容は上の45と同じく通肩座像タイプで、37の「アニョール菩薩像」に類似するが、衣の襞が細かい。

47. [王名欠](92年)立像(右腕を欠くのみでほぼ完全態)。マホーリー出土, マトゥラー博物館(2798, 2801) [図43]。

Sircar, *EI*, XXXIV, pp. 10-11, Rosenfield, *DAK*, No. 81; *MSS*, No. 69, Van Lohuizen, *SP*, pp. 182-183, Plaeschke, No. 148, 静谷640, 高田(図版61, pp. 313; 325-326), Czuma, p. 28, Fig. 3, Bajpayee, IV, 94, Sharma, *SMAM*, p. 105; *BAMS*, pp. 174-175, Fig. 85, Shrava, No. 150, 山本§20-46~47(本文p. 238)。

これは次のような碑文を刻む石板とともに出土したもの。「92年、冬季第1月、第5日、この日に、ヴェーンダ(?) (あるいはヴィンダ、あるいはカンダ) 僧院に住む比丘グラハダーシカ (あるいはグラハダーシカ、あるいはグラマデーシカ) によって、

ストゥーパ (sthupa) が造立された。一切衆生の利益安樂のために。」(4行) 2のカニシュカ3年「サルナート菩薩像」に類似。ただし、両足のあいだには髪束と華の房の組合せが置かれ、後期の作であることを示す。2.9メートルの巨像。よく「マホーリー菩薩像」と呼びならわされるが、「菩薩」の銘記はない。

48. ヴァースデーヴァ93年「ピターマハ」立像(下半身と台座のみ)、ヤムナー河岸出土(?), マトゥラー博物館 (76.1) [図44].

Srivastava, *EI*, XXXVII, pp. 151-153, 静谷1824 (pp. 227-228), Mitterwallner, pp. 88-89, Pl. 25, Czuma, No. 27, Bajpayee, IV, 96, Sharma, *SMAM*, pp. 139-140, Fig. 52; *BAM*, pp. 204-205, Fig. 119; *BAMS*, pp. 190-191, Fig. 109, 定方II, p. 126, III, 付図24, Shrava No. 153, 塚本83.

「大王・天子ヴァースデーヴァの93年、冬季第4月、第25日、この日に、世尊・ピターマハ (Pitāmaha) ・自己の教義を確立した方 (Svamata) ・論破されることなき方 (Avirudha) の像と傘蓋とが造立された。聖なるダルマスワーミ (あるいはダルメーシュヴァラ)、聖なるマーガ、聖なるダマ (あるいはダナ) によって、父サルヴァーナンディ (あるいはシャルヴァナンディ)、母ジーヴァシュリー (あるいはシヴァシュリー) とともに、沙門カーヤスタに帰依して (あるいは書記カーストの沙門によって) 。」(3行) きわめてユニークなスカートをはく。両足のあいだには、髪束、花房、蓮華の蕾からなるもの、左足の外側には男性、右足の外側には女性のそれぞれ四人ずつ、大 (華綱をもつ) ・中・小・極小 (ともに合掌する) の人物像にして配する。後期の作例で、グプタ時代のものともみなす人もいる。

49. ヴァースデーヴァ [年号欠] 像 (台座断片。座像か立像か不明)、ラーカヌー出土, マトゥラー博物館 (G38) [図45].

Lüders, 151b, Vogel, *Cat*, p. 122, Plaeschke, No. 154, 高田26, Shrava, No. 158, Pl. CII.

碑文は断片。「大王のヴァー [ス]...セーナの義理の娘の...」(2行) 台座の右側に獅子、華綱をもつ二人の供養者 (比丘?) の上部が見えるのみ。顔は摩滅している。

以上、クシャトラパ時代 (先クシャーナ時代) と、クシャーナ時代のマトゥラー系の像で年号や王名などの明らかな作例を列举してみたが、見たように、クシャーナ時代のものに関しては、後期 (第IIクシャーナ時代、あるいは後期クシャーナ時代もしくは先グプタ時代、あるいはグプタ時代) に属するものが混じっており、年号通りになっていないことが分かる。いかに年号が若いからといっても、彫像の様式のなかにどう見ても新しい要素が認められたり、碑文の書体がグプタ時代のものに近似していたり、サンスクリット化が進んでいたりする点などで、後期の作とみなさざるを得ないものが存在する。たとえば、

6、12、13、18、19などの例はずっと後にすべきであろうし、20、21、32などはもっと前に置かれるものであろう。したがって、上の表はそのまま編年史的なものとみることはできない。今はただ列挙するのみに留め置き、今後の課題とせざるを得ない。

以上の先クシャーナの4例とクシャーナ時代の49例との計53例について種類分けをしてみると、以下のようになる。

- (1) 「菩薩」座像……………15例
- (2) 座像（含「弥勒菩薩」）……………14例
- (3) 「菩薩」立像……………5例
- (4) 「シャーキヤムニ」座像……………3例
- (5) 「シャーキヤムニ」立像……………3例
- (6) 立像……………3例
- (7) 「ピターマハ」立像……………2例
- (8) 「世尊」座像……………1例
- (9) 「仏陀」座像……………1例
- (10) 「アミターバ仏」立像……………1例
- (11) 像容不詳なもの……………5例

このように、座像が圧倒的に多いが、「菩薩」の像であることを明示するのが一般的であって、「シャーキヤムニ」、「仏陀」の像であるとするのは少なく、また時代的にも新しい。ここには、「菩薩」と「仏陀」とのあいだに意味の上で明確な相違のあったこと、菩薩の像が本当は仏陀の像であることを明言するのに時間のかかったことが示唆されており、仏像の創作において、いろいろと紆余曲折の存在したことを証している。⁽⁵⁾

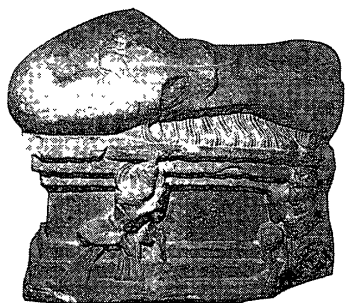
上の表のなかで、やはり「ピターマハ」立像と「アミターバ仏」立像とが特異な存在であり、注目をひく。マトゥラーの仏像崇拜の展開のなかで、どのような意味をもっていたのか、ひいてはインド仏教史上どのような位置を占めていたのか、大きな課題を提供するものであり、大いに検討に値しよう。（未完）

註

- (1) 拙稿「Yakṣa と菩薩——Mathurā の仏教をめぐって——」（『金沢大学文学部論集・行動科学科編』第3号，1983，pp.79-108）。
- (2) 高田修『仏像の起源』〔高田〕（岩波書店，1967）pp 307-309, J. M. Rosenfield, *Dynastic Arts of the Kushans* [DAK], California, 1967, pp 263-273（番号が打たれていないが付して参照した）。Do., "The Mathura School of Sculpture [MSS],", in *The Papers on the Date of Kaniṣka*, ed. by A. L. Basham, Leiden, 1968, pp 259-277, R. C. Sharma, *Buddhist Art of Mathurā* [BAM], Delhi, 1984, pp. 171-236, S. J. Czuma, *Kushan Sculpture · Images from Early India*, Indiana Univ. Press, 1985, pp. 227-231 [Czuma], H. Härtel, "The Concept of the Kapardin Buddha Type of Mathura," *South Asian Archaeology 1983*, Vol 2, 1985, pp. 653-678 [Härtel], G. v. Mitterwallner, *Kuṣāṇa*

- Coins and Sculptures*, Mathura, 1986, pp. 53-162 [Mitterwallner] , R. C. Sharma, *Buddhist Art Mathura School* [BAMS] , New Delhi, 1995, pp. 161-219.
- (3) A. L. Basham (ed.), *The Papers on the Date of Kaniṣka*, Leiden, 1968, 拙著『インド仏塔の研究』(平楽寺書店, 1984) pp. 28-29. 最近は東洋史家のあいだでは、144年説が採用されているようである。小谷仲男『ガンダーラ美術とクシャン王朝』(同朋舎, 1996) pp. 54-55.
- (4) マトゥラー像に関する碑文については、H. Lüders, “A List of Brahmi Inscriptions”, Appendix to *EI*, Vol. X, Calcutta, 1912, Do., *Mathurā Inscriptions*, Göttingen, 1961 [Lüders] , H. Plaeschke, “Die Chronologie der Mathurā-Inschriften und das Kaniṣka-Problem”, *Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt Universität zu Berlin, Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe*, Band XXV, 1976, No. 3, SS. 333-340 [Plaeschke], 静谷正雄『インド仏教碑銘目録』(平楽寺書店, 1979) [静谷], K. D. Bajpayee, *Early Inscriptions of Mathurā — A Study*, Calcutta, 1980 [Bajpayee], 定方晟「マトゥラー刻文の和訳」(Ⅰ)(『東海大学紀要文学部』第53輯, 1990, pp. 61-83), (Ⅱ)(同上第54輯, 1991, pp.97-126), (Ⅲ)(同上第55輯, 1991, pp.75-89)[定方], D. C. Sircar, *Select Inscriptions [SI]*, Vol. I, Delhi, 1991, S. Shrava, *The Dated Kushāṇa Inscriptions*, New Delhi, 1993 [Shrava], 塚本啓祥『インド仏教碑銘の包括的研究』(研究成果報告書, 1996) [塚本] 等参照。
- (5) これらの点については、*Divyāvadāna* に載る一挿話 (Vaidya ed. pp. 222-228) がきわめて示唆的である。前掲拙稿参照。

図版



〔図1〕 No. A, 「菩薩」座像（断片）



〔図2〕 No. C, 「菩薩」座像、カトラー出土



〔図3〕 No. D, 「菩薩」座像（断片）



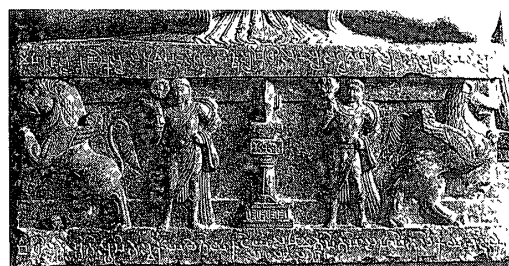
〔図4〕 No. 1, 2 年銘「菩薩」立像



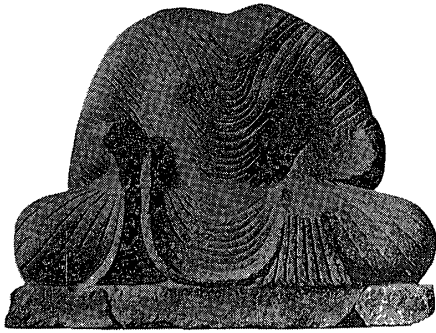
〔図5〕 No. 2, 3 年銘「菩薩」立像



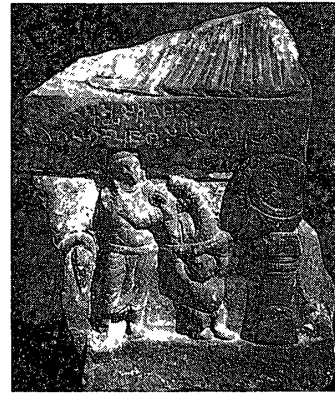
〔図6〕 No. 3, 3 年 (?) 銘「菩薩」立像



〔図7〕 No. 5, 4 年銘「菩薩」座像



〔図8〕 No. 6, 4/40年銘座像



〔図9〕 No. 7, 5年銘座像（断片）



〔図10〕 No. 8, 5年(?)銘「菩薩」立像



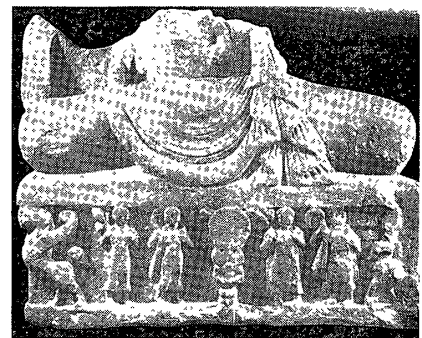
〔図11〕 No. 9, 6年銘立像



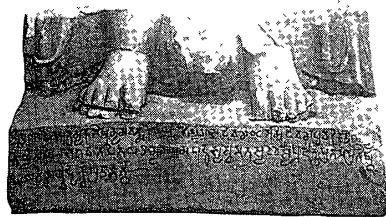
〔図12〕 No. 10, 8年銘「菩薩」座像



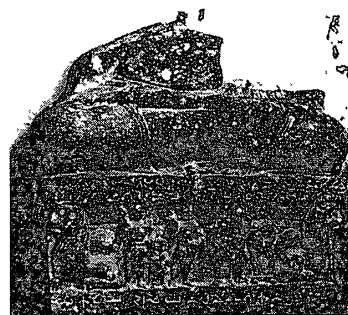
〔図13〕 No. 11, 8年銘座像



〔図14〕 No. 12, 8年銘「菩薩」座像



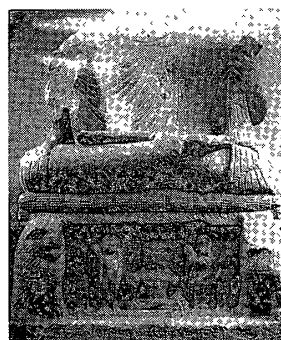
〔図15〕 No. 13, 14/54/114年銘「ピターマハ」立像



〔図16〕 No. 16, 17年銘「菩薩」座像



〔図17〕 No. 17, 20年銘「菩薩」座像



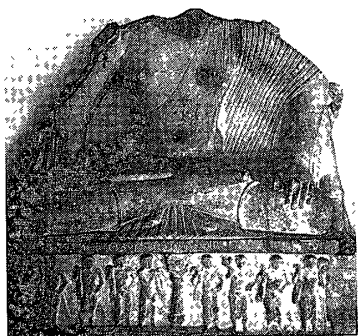
〔図18〕 No. 18, 22/122年銘「仏陀」座像



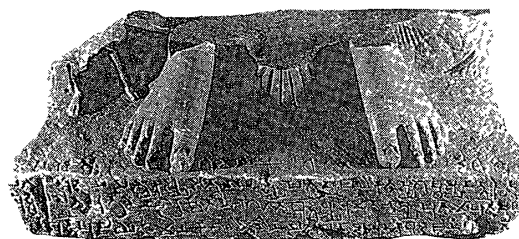
〔図19〕 No. 19, 22/122年銘「シャーキヤムニ」立像



〔図20〕 No. 20, 23年銘「菩薩」座像



〔図21〕 No. 21, カニシュカ [年号欠] 座像



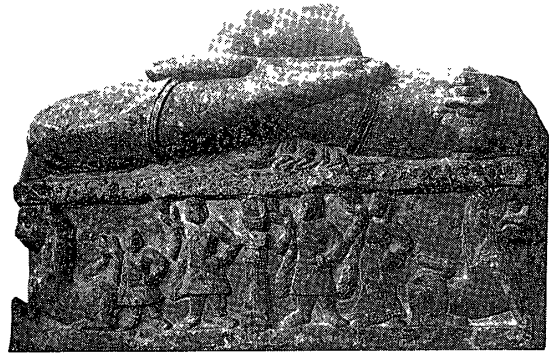
〔図22〕 No. 22, 26/28/25年銘「アミターバ仏」立像



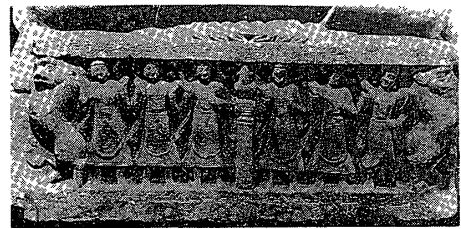
〔図23〕 No. 23, 28年銘「世尊」座像



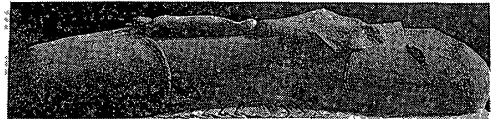
〔図25〕 No. 26, 31年銘座像（断片）



〔図24〕 No. 25, 29年銘（弥勒菩薩）座像



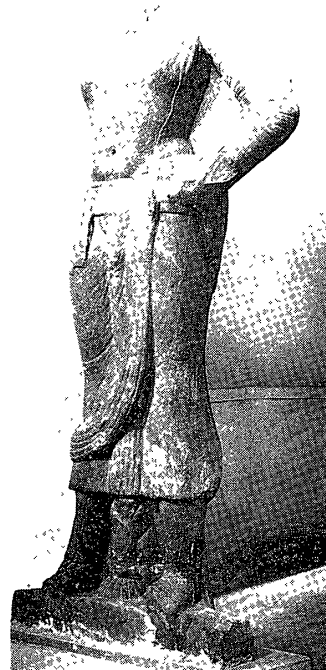
〔図26〕 No. 27, 31年銘「菩薩？」座像



〔図28〕 No. 29, 33年銘「菩薩」座像



〔図27〕 No. 28, 32年銘座像、アヒチャットラー出土



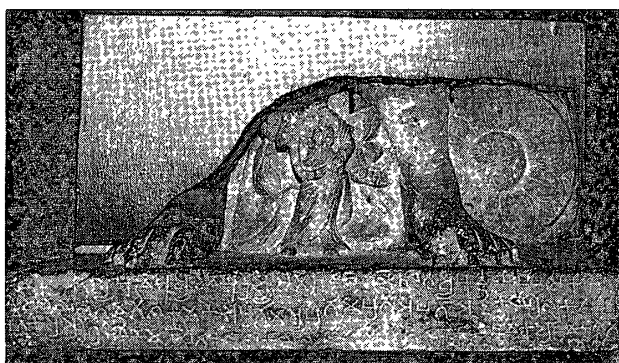
〔図29〕 No. 30, 35年銘立像



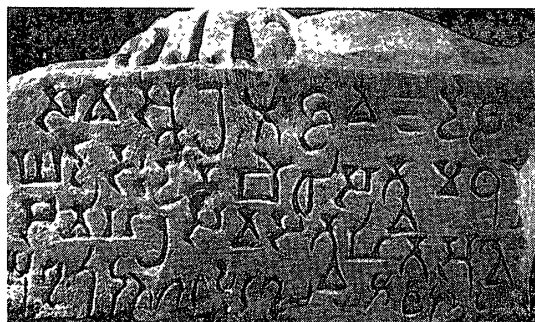
〔図30〕 No. 31, 36/136年銘座像



〔図31〕 No. 32, 39年銘「菩薩」座像



〔図32〕 No. 33, 45年銘「シャーキヤムニ」立像（断片）



〔図33〕 No. 34, 46年銘「菩薩」立像（断片）



〔図34〕 No. 36, 51年銘「シャーキヤムニ」立像（断片）



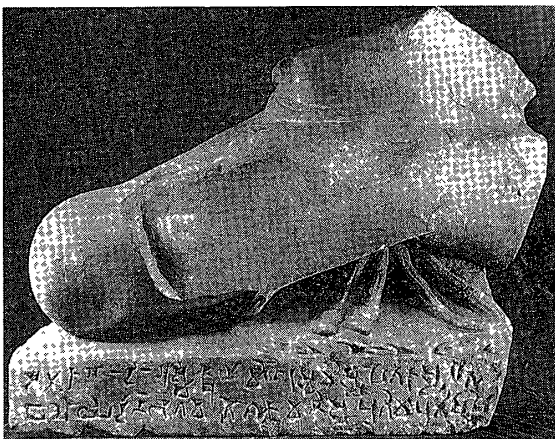
〔図35〕 No. 37, 51年銘「菩薩？」座像、アニヨール出土



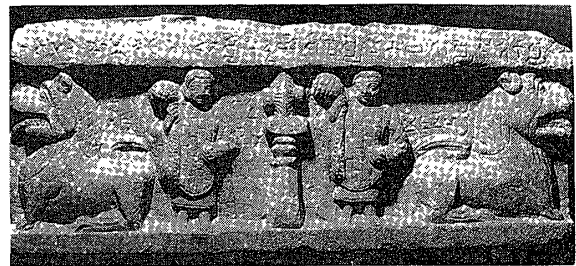
〔図36〕 No. 39, 64/67年銘「シャーキヤムニ？」
座像（断片）



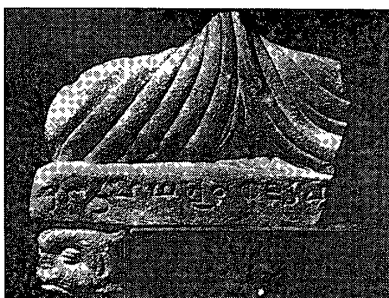
〔図37〕 No. 40, 64/164年銘「菩薩」座像



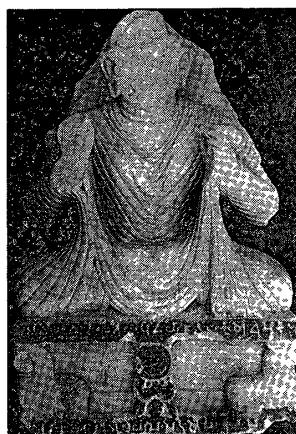
〔図38〕 No. 42, 75年銘「シャーキヤムニ」座像（断片）



〔図39〕 No. 43, 79年銘「菩薩」像（台座のみ）



〔図40〕 No. 44, 83年銘座像（断片）



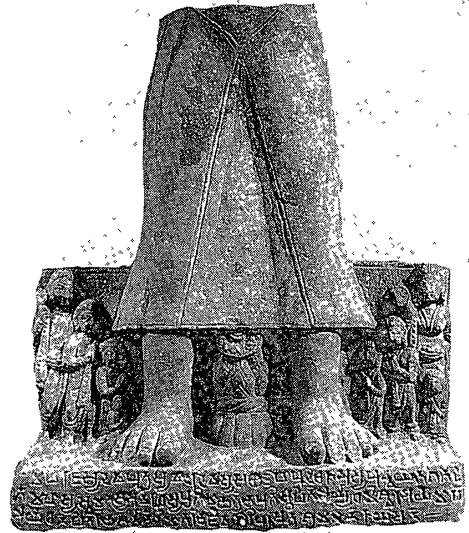
〔図41〕 No. 45, 83年銘座像



〔図42〕 No. 46, 83年銘座像



〔図43〕 No. 47, 92年銘立像



〔図44〕 No. 48, 93年銘「ピターマハ」立像



〔図45〕 No. 49, [年号欠] 像台座（断片）